

---

# 笑顔のトナリにずっと

折原 奏

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

笑顔のトナリにずっと

### 【Nコード】

N0093C

### 【作者名】

折原 奏

### 【あらすじ】

高校生の和泉悠人と、長瀬瑞樹は、中学の頃からいつも一緒に遊んだり泊まりに行ったりと仲がいい。そんな二人の所属するテニス部内で、最近瑞樹が嫌がらせを受けている。その首謀者が優しい木原先輩だと瑞樹が言い出して……。

## 第1話

ロッカーを開けた瞬間、長瀬瑞樹ながせみずきがため息混じりに呟いた。

「はあ…何だよ、まただよ」

僕は、瑞樹がじつと見ているロッカーの中を覗き込んだ。

放課後の部室。部活を終えて、制服に着替える所だった。

ロッカーの中に、当然あるはずの制服一式が、忽然と消えていたのだ。

高校に入って、親友の瑞樹と一緒に僕、和泉悠人いずみゆうとはテニス部に入った。

一ヶ月たっても、ラケットにボールがかすりもしない僕は、タマ拾いの日々だけど、小学校の必修クラブでテニスをしていたという瑞樹は、もともとスポーツ全般を軽くこなすだけあって、見る間に上達していった。

数日前から毎日、今日みたいな嫌がらせが瑞樹の身におきている。

「犯人はあいつだな」

瑞樹は犯人に心当たりがあるんだと教えてくれた。

「ここだけの話。俺と悠人のヒミツだからな」

意味深に声をひそめて瑞樹は言う。僕が、「うん、ひみつ」とうなずくと。

「実際やってんのは別のヤツかもしれないけど、首謀者きぼうしは木原祥司きのはしやうしだと思う」

「木原先輩が？」

嘘だらうって思った。木原先輩と言えば、三年のテニス部部长で、爽やかな、そしてカッコ良くて、女子にも人気があつて優しい……。

「信じらんねーって思ってるだろ？ 悠人」

「うん。だって、そういう陰湿なことをするような人に見えない」

「見たままがそいつの全てとは限らないぜー」

それはわかる。だって瑞樹がそうだもん。

最初は近寄り難くって遠くから見ているだけだった。

スリムな体にすらりとした手足。顔も女の子でも通用しそうなくらい綺麗で、少し茶色がかった瞳と同じ色の、さらさらの髪。すれ違う時、ふわりと香るいい匂い。

一言で言うと、「天使」だって思った。

「あいつ、俺とすれ違うときわざとぶつかったり、足踏んだりしやがるんだぜ。文句あるなら正面からかかってきやがれっつーんだ」  
「だけど天使はしゃべると結構な毒舌で、かなり喧嘩っ早かった。

「それより瑞樹、制服どうする？」

「探すに決まってるだろ。どうせゴミ箱なんか突っ込んであるんだ」

瑞樹がゴミ箱を探ると、本当に制服が出てきた。だけど制服はゴミだらけで、とても着られたものではないのに、瑞樹は軽くゴミを払うと「まあいつか」なんて言ってそれを着た。

「ちょっとゴミ臭いけど、ごめんな」

着ている瑞樹の方が気になるだろうって思うのに、瑞樹は僕の方を気遣ってくれる。

「明日あいつに、俺の何が気にいらねーか、直接聞いてやる」

帰りのバスの中で、瑞樹は言った。

「ケンカする？」

「ケンカじゃねーよ。直談判するだけだ」

場合によつてはケンカになるかもしれないけどね。と瑞樹はいたずらっぽく笑った。

「悠人、心配してくれてるんだろ？」

「証拠もないのに、言いがかりだって言われるかもしれないじゃんか」

「ストレートに、俺をいじめてんの？ とは聞かねーよ。もっとちゃんとうまくやるって」

瑞樹は心配するなって言って、笑った。

そつだよ。瑞樹はちゃんと考えているんだ。

「ところで悠人。今日うちに泊まって行けよ」

瑞樹は、家に電話しとけよ。と言って、強引に僕の泊まりを決定した。

僕の母親と瑞樹のお母さんは、仲がいい。

中学一年の時に、一緒にPTA役員をしたのがきっかけで、意気投合した。お互いの家を行き来するようになり、自然に僕と瑞樹も話すようになった。

親が親しくなっていなければ、たぶん僕と瑞樹は話もせずに卒業していただろう。それくらい僕と瑞樹に共通点はなかった。

頭の出来も違ったし、勉強を瑞樹から特訓されなければ、この高校を選んでさえいなかったと思う。

バスを降りて、母親に電話をかけた。

瑞樹のうちに泊まるって言ってダメだと言われた事は、かつて一度もなかった。

今日も二つ返事でOKだ。

「今日、すき焼きだぜ」

同じく母親に、僕が泊まることを連絡したらしい瑞樹が、「やったあ」と笑う。

瑞樹のうちは、十階建てのマンションの最上階にある。

「ご飯出来たら呼ぶわね」

瑞樹のお母さんはいつもニコニコして愛想がいい。

瑞樹の美人は、きっと母親譲りだ。

瑞樹の部屋に入り、鞆を置くと、泊まりに来たときにいつも貸してくれる自分の部屋着を、瑞樹が出してくれた。

出会った頃、僕と瑞樹は、背も体形もほとんど同じで、洋服も靴のサイズもぴったり同じだった。ただ最近、瑞樹の目線がちょっとだけ高くなっている。

僕の背は、中二で止まったままで、いまだ伸びる気配がない。瑞

樹だけが先に大きくなって行って、何だかひとり取り残されたように焦る。

扉の向こうで、瑞樹のお母さんが「ごはんよー」と呼んだ。食卓につくと、ちょうど瑞樹のお父さんが帰って来た。

「今日はケンカにならないように、たくさんお肉を買ってあるのよ」以前、すき焼きをご馳走になったときに、瑞樹とお父さんが、肉の取り合いをしたんだ。親子って言うより、兄弟みたいなんだよね。そして今日。

たくさん肉があると言うのに、やっぱり二人は取り合っていた。悠人も食えよ。遠慮してると、食いそこなうぞ」

瑞樹が僕の小鉢に、肉を入れてくれた。

僕は小食だから、これでもすでに結構お腹一杯だったんだけど、せっかく瑞樹が取ってくれたんだからと、無理して食べた。

嵐のような食事の後、お風呂に入らせてもらってから瑞樹の部屋に行く。

「湯冷めしねーうちに、ベッドに入れ」

すぐに腕を引っ張られ、ベッドに寝かされる。

「寒くないか？」

「もう五月だよ、瑞樹」

だから寒くないよって笑って答えた。

瑞樹は優しい。ちょっと過保護なくらい、世話を焼いてくれる。

翌日、瑞樹のお母さんが作ってくれたお弁当を持って、瑞樹と一緒にバスで登校した。

「じゃあ昼休み、いつもの場所だな」

バイバイと手を振って、昇降口で瑞樹と別れる。

瑞樹とはクラスが違うんだ。校舎も東棟と西棟とで離れている。

「おっはよー、和泉くん」

同じクラスの葵ちゃんだ。

同じテニス部だから、他の女子よりも多く話す。

「今日も瑞樹くんと一緒だったね」

「うん」

「仲いいもんね、二人。なんか割り込めない空気あるよね」

「そんなこと……ないと思うけどな」

「じゃあ私が割り込んでもいい？」

それは、僕たちと友達になりたいってことかな。

「瑞樹くん、彼女いない？」

「いないけど……」

ぴんときた。葵は瑞樹を狙っているんだ。

割り込むってそういう意味だ。

「今度三人で遊ばない？」

「瑞樹に聞いとくよ」

「ありがとー和泉くん」

もうOKがもらえたように喜んで、葵は先に教室に入ってしまった。

そして昼休み。いつもの屋上で葵の話をした。

「だれそれ、ヤダよー。めんどくせー」

葵のことを話したら、瑞樹は素っ気なく却下した。

「悠人、女なんかとしゃべるなよ」

「そんな事、言われても……」

「女、うるせーじゃん。高い声でキヤーキヤー騒ぐの。しゃべり方とか、なーんか甘ったれてて嫌なんだもん」

キヤーキヤー騒ぐのも、甘ったれた声でしゃべるのも、瑞樹を意識しているからだろう。

僕なんか騒がれたことも、甘えられたこともないよ。

「じゃあ葵ちゃんの話は……」

「興味ねーから」

「そうなの？」

「そうそう。俺は女と遊ぶより、悠人と遊ぶ方が楽しいんだもん」

…けっこう可愛いよ、葵ちゃん。クラスの中でも一番って、男子

が騒いでるよ」

「俺には悠人が一番かわいいー」

せつかくモテてるのに、僕から言わせればすごくもったいない。

「あーうまかった。悠人がいると、母ちゃんの弁当が豪華になるんだもんな。毎日泊まればいいのに」

弁当箱を袋にしまいこみながら、瑞樹が笑う。

「悠人とずっと一緒にいたいよー」

五月の爽やかな風に髪を揺らしながら、瑞樹は爽やかな笑顔を僕に向ける。

誰に対しても無愛想な瑞樹が、僕にだけ向けてくれる最高の笑顔。

「今週の土曜日は休みだろ？ 悠人、金土って泊まれよ」

「そうだね。いいよ、泊まる」

うなずいたと同時に、昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴って、僕と瑞樹は「じゃあ放課後」と約束して別れた。

夕食を終え、入浴も済ませてからゆつくりと部屋で寛いでいた時、自宅に木原先輩から電話がかかってきた。どうやら部の連絡網を見てかけてきたらしい。

駅近くの公園に呼び出された僕は、断ることが出来ず、母に言うて出かけて行った。

小さな街灯ひとつしか明かりがない暗い公園に、一歩足を踏み入れた途端、すぐに不安になった。

「和泉」

ポンと後ろから肩を叩かれ、「ギャッ」と声をあげた。

「ああごめん。びっくりさせたね」

振り返ると、いつもテニスコートで笑っている、木原先輩の優しい笑顔があった。

木原先輩は、急に呼び出してごめん、と前置きしてから話を始めた。

「実は今日、長瀬に相談されたんだ。あいつ、イジメにあってるら

しいね」

「…みたいです」

「長瀬はどうも、首謀者は僕だと決め付けてるようなんだ。どうして僕だと思われているんだか、分からなくて参る」

ねえ。と同意を求められ、ハイともイイエとも答えられず困った。「僕がそういう陰湿なことをするように見える？」

「……瑞樹が、嫌がらせされてるのは本当です。部内での事だし、部員の誰かだろうって事は僕も、そうかなって思うけど、それが先輩かって言われると正直、わかりません」

本人を目の前にして、先輩でしょうとは言えない。それに木原先輩がイジメなんかに加担するとはやっぱり思えない。けど、人は見かけによらないって言われれば、そうかな、とも思う。

「ホントは明日にしようと思ったんだけど、和泉くんには、早く言っておきたくて」

「僕に、ですか？」

「僕じゃない。やってないよ、嫌がらせなんて」

先輩がこんなにきっぱり言ってるんだから、やっぱり瑞樹の勘違いなのかもしれない。

「だけど、やったのが部の誰かだとしたら、それは部長である僕の責任だ。ちゃんとそいつを見つけてやめさせるようにするから。僕が疑われているのはつらいけど、いいや。キミだけでもわかってくれば僕は救われる」

やっぱり瑞樹の勘違いだよ。

「今日はわざわざ悪かったね」

送るよ。と言って先輩が僕の肩に手をかけた時。

「悠人！」

公園の入り口から僕を呼び、こっちに向かって走ってくるのは、

瑞樹？

「ためー悠人に触んなっ！」

「うわぁっ」

止める間もなく、瑞樹が先輩を殴りつけた。

すぐに瑞樹は僕の肩を抱き寄せるようにすると、

「悠人に何かしやがったら殺すからな！」

倒れたままの先輩を見下ろし、怒鳴りつける。

「行こう、悠人」

「瑞樹、僕大丈夫だよ。何もされてない」

「されてたまるか」

僕は後ろを振り向く間もなく、ぐいぐい引っ張って行かれた。

「誤解だよ瑞樹、木原先輩は……」

「騙されんなよ、悠人」

公園の出口まで来ると、そこに瑞樹の自転車が倒れていた。瑞樹

は自転車を起こして、僕を後ろに乗せる。

「俺に対して嫌がらせされるのは我慢できるんだ」

自転車を走らせながら、瑞樹が話す。

「今日、あいつを煽ったせいだ。悠人にまで手をかけようとするなんて、許せねーよ」

バカヤロー。と怒りながら瑞樹は自転車をかっ飛ばした。

家まで送ってもらつと、瑞樹は先に僕を自転車からおろす。そして自分も降りると、僕の両肩をつかんだ。

「テニス部なんかやめよう悠人。悠人を危険にさらしてまで続ける意味ねーし」

「けど瑞樹、せっかくレギュラーになったのに」

来週、他校との初試合が予定されている。その選手に瑞樹は選ばれているのだ。

「そんなのどうでもいい」

ふんつと瑞樹は吐き捨てるように言った。

「良くないよ。ちゃんと責任果たさなきゃダメだつてば」

選手に選ばれるなんて、すごいことなのに。僕なんか一生かかっても選手になれないかもしれなのに、そんなのどうでもいいなんて

「やめるのは、試合後でもいいだろ？」

「そんなに待ってたら悠人が……」

「大丈夫だってば」

木原先輩は、そんな人じゃないんだから。

瑞樹は、なにかあつたらすぐ俺に言えよ。と、くどいくらい念を押して、やっと部を続けることに承知した。

瑞樹が帰った後、自分のベッドに潜って考えた。

瑞樹がまさか部活を辞めようと言い出すとは思わなかった。瑞樹なら、途中で投げ出したりせず、嫌がらせしたヤツと、きっちりかたをつける所までやると思っていたんだ。僕のせいなのかな。

瑞樹が僕を大切に思ってくれていることはわかってる。今日だって携帯を持って出かけなかったばかりに、かけてきた時つながらなくて、心配して自宅の電話にまでかけてくれた。それで、出かけたことを聞いて、焦って駆けつけてくれたんだって後で知った。大事にされて嬉しいけど、僕以外の事をどうでもいいような言い方をされるのはどうかと思う。

瑞樹が僕を大切にしてくれているのと同じくらい、僕は瑞樹を大切にできているだろうかと、ふと思った。

できてないかも。僕はっかり守られてる気がする。

瑞樹に甘えてばかりじゃなく、僕も強くならなきゃ。

そう決心して僕はギュッと目をつぶった。

翌日の昼休み、屋上に行こうと廊下に出た僕を、後ろから木原先輩が呼び止めた。

「ちょっと話があるんだけど、いい？」

瑞樹が屋上で待っているはずだ。遅くなったら心配する。

だけど先輩は、迷っている僕を「ちょっとだけだから」と、強引に部室に連れて行く。

パタンとドアが閉められ、カチャリと鍵をかける音がした瞬間、

やばい気がした。

「昨日、長瀬にいきなり殴られてさ、痛かったな」

「うわうわ、怒ってる？ まさか仕返しされるんじゃないやあ…。」

「長瀬はよほど和泉くんが大切なんだね」

先輩はにこつと笑って、僕に手を伸ばし、頭を撫でる。

先輩を見上げると、相変わらず優しい目で僕を見てた。

「長瀬の大切な和泉くんと、僕も仲良くしたいな」

目の前でにっこり微笑まれて、僕は「？」と首をかしげる。

「わかんない？ じゃあストレートに言うよ。キミが好きなんだ。

付き合ってみない？」

「……………えええっ！」

やっと意味がわかって、びっくりして後退る。

なんて言った？ 先輩。

……………僕を……………好き？

「僕、男……………ですけど」

「分かっているよ。悠人くん」

僕が一步下がると、先輩が一步近づいて来る。一步下がり、二歩

下がりしていたら、背中がドンツと壁に突き当たる。

「悠人くんは僕が嫌い？」

先輩の両手が壁をついて、僕は体を囲まれるような格好になって

しまう。

見上げる先輩が、いつもよりすごく大きく見えて怖い。

「き……………嫌いとか……………」

そんなんじゃないけど…と、口の中でもぞもぞ言った。

「けど先輩、女の子にすごい人気で。なのに何で僕？ 男なのに」

からかわれているんだろうか。これってやっぱり仕返し？

「入部した時からずっと見てたよ。長瀬と仲良くて、嫉妬してた」

「まさか、だから瑞樹に嫌がらせしてたんですか？」

「あれ？ 僕じゃないって言ったはずだけど。心外だな、疑われて

たの？」

「あ、ごめんなさい」

慌てて僕が謝った時、携帯が鳴った。

「瑞樹からだ」

僕が遅いから心配してかけてきたんだ。

「なんだ、邪魔しやがって」

携帯はなんと先輩の手に奪われてしまった。

「ピッ」と電源を切られ、しかも自分のポケットの中に入れてしま  
う。

「僕じゃ不満？」

何事もなかったように先輩は話を続ける。

「ってゆうか男同士だし。困ります、僕……」

おなかがすいてきたし、先輩が何言ってるのか理解し難いし、イ  
ライラした。

「ちよつとつて言ったでしょう、先輩。これじゃあ昼ご飯を食べる  
時間がなくなります」

「怒るなよ、悠人。ハイハイわかった。わかりましたよー」

先輩は、行っていいよ。と鍵とドアを開けてくれた。

「失礼します」

言って頭を下げつつ先輩をチラリと見ると、笑顔で「放課後部活  
でね」と手を振られた。

「瑞樹待ってるかなー」

急いで屋上への階段を駆け上がるが、いつもの定位置に瑞樹の姿  
はなく、屋上全体を探したけれど、見当たらなかった。

怒っちゃったのかな、それとも心配して探してくれてる？ 携帯  
も出られなかったし。

「あつ携帯！」

先輩がポケットに入れたままだ。

あの携帯は、瑞樹と色違いのお揃いで買った大事な携帯なんだ。

三年の教室を訪ねるのは、すごい勇気があるけれど、返してもらわ  
なきゃ困る。

「これだろ？ 携帯」

僕が口を開く前に、先輩の方から携帯を返してくれた。

「じゃあまたね」

今回は、あっさりと解放してもらえてホッとする。

結局、瑞樹は見つからないし、携帯もつながらないまま五時間目になった。

五時間目の体育はマラソンで、昼食抜きにはつらかった。

けれどなんとか倒れずに体育を終えて、着替えてソツコーで弁当をかきこんだ。

「今頃ごはん？」

葵が立っていた。ちょっと気まずい。

「いろいろあつてね」

瑞樹の気持ちはまだ伝えることが出来ず、一緒に遊ぼうって言った誘いを、ずるずると引き延ばして放置していた。

「いつも瑞樹くんと食べてるのにね」

「…だからいろいろあつたんだってば」

その時はまだ、知らなかったんだ。僕がそれを知ったのは、放課後の部活の時で……。

二話に続く

第1話 (後書き)

ここまで読んで下さり、ありがとうございました。  
少しでも楽しんでいただけましたら、また続きを読んでくださいね。

笑顔のトナリにずっと

## 第2話

「瑞樹、どうしたの、その顔!」

瑞樹の顔は、傷だらけになっていた。

瑞樹は、僕をチラッと見ただけですぐ目をそらし、僕を押しつけるようにして、先に部室を出て行った。

瑞樹を追いかけて外に出たところで、葵につかまる。

「いろいろって瑞樹さんとケンカしたって事だった?」

相手は僕じゃない。

じゃあいったい誰と?

誰が瑞樹をあんなにしたの?

「すごい事になってるねえ、長瀬」

「あ、先輩」

痛々しいね、と木原先輩は少し顔をしかめて、遠くの瑞樹をじっと見ている。

「先輩……じゃないですよね」

「……たく……キミは、僕をなんだと思ってるの」

先輩はずっと僕といたんだっけ。僕が携帯をもらいに行った時もちゃんと教室にいたし、瑞樹に危害を加える時間なんてない。

先輩は無実だよな。

そして部活が終わり、僕は散らばったボールを拾い集めていた。いつもなら瑞樹も手伝ってくれるのに、今日はさっさと部室に戻っていく。

「相当怒ってるんだ、瑞樹」

ハア……とため息をつきながら片付けていると、木原先輩が「手伝うよ」と言った。

「いいですよいいです」

タマ拾いなんて雑用、部長の仕事じゃない。

「早く済ませて帰ろう。送って行くから」

別に送ってもらわなくても一人で帰れます、と言いたかったがやめた。

最後の一個を片付けて、部屋に持って入ろうとしたとき、ちょうど着替えを終えた瑞樹が出てくるのに出くわした。

瑞樹は、僕と先輩を交互に見ると、あからさまにムツとした。そして突き飛ばすようにして行ってしまふ。

「いいよ、後は僕がやっとく。追いかけておいで」

先輩の好意に甘えて、僕は瑞樹を追って走った。

「瑞樹、待ってよ」

瑞樹は走ってたわけではないからすぐに追いついた。

「…なんだよ」

不機嫌ながらも一応振り向いてくれる。

「今日の昼休みの事なんだけど」

「ああ……。もういいよ」

「いいって、許してくれるってこと？」

「バーカ。勝手にすりゃいいだろうって事。あいつと付き合うんだろ

? 好きだったんだろ、良かったじゃん。で、俺のこと、邪魔なん

だろうが」

「み…瑞樹、なに言って……」

「昼休み、悠人どこ行ってた? 誰といた? あいつといたんだろ

? 携帯切って何してた?」

畳み掛けられるように聞かれて、僕は動揺した。

「言えない様な事してたんだろっ」

瑞樹は怒ったまま、言い捨てて走っていきこうとする。

「待って瑞樹っ……あの、その怪我どうしたの!」

僕にしては素早く腕を掴むことに成功した。

「…テニス部二年のやつらだよ。悠人を探してた時にやられたんだ。おまえとあいつの邪魔すんなって、いきなり殴りやがった。全部わかった。今までの嫌がらせもあいつらだ。悠人がいいなら俺は邪魔しない。仲良くやればいいし」

じゃあ、バイバイって瑞樹は誤解したまま、行っちゃったんだ。誤解は早く解かなきゃいけないって思っていたけど、今は無理みたい。瑞樹が冷静になってくれなきゃ聞いてももらえない。

昼休み、いつものように屋上に向かった。

遠くから瑞樹が見えたけれど、一人じゃなかった。

葵が自分で動いたんだって分かった。

声をかけるのがはばかられて、僕は教室に戻り、ひとりで弁当を食べた。

今日は金曜日だ。この前瑞樹に、泊まりに来いよって言われた日。もう家にもちゃんと言ってあるけれど、こんな状態で泊まりに行ってもいいのだろうか。

部活の後に、瑞樹と話そうと思っていたけれど、瑞樹は部活を休んでいた。

「本格的にケンカしちゃったか」

先輩が、なぐさめか冷やかしか、何かわからない言い方をするのにムカついた。

「片付け終わったら、映画でも見て帰らない？」

「僕、今日は用があるんです」

のんきに映画なんか見てる場合じゃないよ。

「じゃあ、明日は？ 休みだし、どこか行こうよ。迎えに行くし」

僕は先輩と向き合った。すでにほかの部員は部室に戻ってしまった。テニスコートには僕と先輩の二人きりだし、誰にも聞かれる心配はない。

「僕、先輩とは付き合えません。すみません」

深々と頭を下げて断った。だけど。

「悠人。堅苦しく考える必要はないんだよ。僕は悠人と仲良くしたいだけなんだ。僕と一緒にいれば、長瀬も嫌がらせをされずにすむんだ」

「先輩、二年の先輩たちがやってたこと、知ってたの？」

「昨日知ったよ。あいつら僕が悠人を気に入ってることを知っていたんだ。僕のために、悠人と仲のいい長瀬に嫌がらせをしていたことも、昨日、暴力を振るったことも白状した。ちゃんと注意はしたけど、またキミと長瀬が仲良くしていたら、隠れてやらないとも言い切れない」

そんなの脅しじゃんか。

先輩がもうするなって言えば、言うことを聞くんじゃないの？  
もしかして先輩がやらせてる？

瑞樹が言っただように先輩が首謀者なのか？

「仲良くしよう、悠人」

顎をぐいっと持ち上げられ、先輩が顔を近づけてくる。

咄嗟によけたが、先輩の唇が僕の唇をかすめた。

「おとなしく言うことを聞いてくれないか、悠人」

どんつと突き飛ばされ、僕が倒れたところに、先輩が馬乗りになる。

「何だよ、何するんだよ。うわっ……やめ……」

着ていたジャージのチャックを、先輩が一気に下ろしてきた。

僕もしかして、襲われる？

「嫌だああ！」

可能な限り暴れまくった。手が先輩の頬に、顎に、当たる。

怖くて怖くて、涙が勝手にボロボロこぼれる。

冗談じゃない、こんなこと。

と思つた瞬間、ふつと体が軽くなり、目を開けると、先輩が傍らに座って頭を抱えていた。

「悪かったよ。もうなにもしない」

泣かせるつもりはなかった、と先輩は言った。

「長瀬が入部してくるまで、僕が女の子の人気を独占していたのに、あいつが全部持って行っちゃった。その上、一年のくせにレギュラーまで取って、ムカツクって、二年のやつらの前でつい、言っちゃった。あんな一年、辞めさせてーとかも言っちゃったよ」

先輩は、ひとつ小さなため息をついた。

「まあ、やったのはあいつらだし、僕はやれとは一言も言ってるし、僕の知ったことじゃねーって、知らんぷりしてたんだけど……」

先輩は、途中から僕も手を出しちゃったと、肩をすくめた。

「先輩も瑞樹をいじめたの？」

「僕が手を出したのは、おまえだよ、悠人」

確かに出された。けどこれって、いじめ？

先輩が僕に手を出した事と、二年の先輩たちの嫌がらせは、全く別のものだった。

瑞樹は誰に対しても素っ気ないのに、僕には笑いかけてる。それを見て先輩は、瑞樹が僕を大事に思っていることに気がついた。どうしてだろうと、僕を見ているうちに、僕のことを気に入っちゃったらしい。

元はといえば、僕の携帯を使って先輩が、『今日から先輩とお昼ご飯を食べる』みたいなメールを、勝手に瑞樹に送ったことで、瑞樹が僕を疑った。で、そのうえ二年の先輩たちに、僕と先輩は付き合ってたって言われて決定打になった。

先輩は先に帰ってしまったけど、僕はひとりで部屋に残っていた。頭を冷やさなきゃ、動けないんだもん。

力づくで無理やりに自分のものにしたけど、泣いてしまった僕の涙を見て、良心が痛んでやれなかった。と聞けば、本当はいい人なんだろうな、とも思えた。

先輩は諦めてくれたし、イジメ問題も一応、解決って事でいいんだよね。

あとは瑞樹と仲直り出来ればめでたしなんだ。きっと誤解さえ解ければ元通りなんだと思うけど。

果たして僕、うまく説明できるだろうか。

家まで行ってみたけれど、瑞樹は留守だった。

ほかの友達と約束して、出かけたらしい。

瑞樹のお母さんは、僕以外の友達と瑞樹が出かけるなんて初めてのこと、びっくりしてるって言ったけど、僕だってびっくりだ。瑞樹が泊まりに来いって言ったくせに、約束はキャンセルにされてしまったようだ。それにお母さんも、僕が泊まることを聞いていなかった。

がっかりして僕は家に帰った。

誤解を解くのにやっぱメールじゃ伝わらない。電話も途中で切られたらアウトだ。

直接会いたかった。どうしても直接会って誤解を解きたかった。だけどせつかくの土、日も瑞樹はつかまらなかったんだ。

そして月曜日、葵から聞かされた。

「瑞樹さんとデートしちゃった」

葵は「ほら見て」と無理やり携帯を僕に見せた。

携帯の画面に写っていたのは、瑞樹の笑顔。

葵と二人で写っている。

「これは昨日、遊園地に行った時に撮ったの」

女はうるせーって言ったのに。

葵に興味ないって言ったのに。

女と遊ぶより僕と遊ぶほうが楽しいって……。

「和泉くん、恋人が出来たんでしょ？ だから瑞樹くん、暇になったからいいよって言うてくれたんだ」。金曜の夜と土曜、日曜って会ってくれたんだよ」

「……付き合ったの？」

葵は可愛い。男の僕と遊ぶより、可愛い女の子の方が瑞樹だっていいに決まってる。

今までは僕がくつついていたから女に行けなかっただけで、本当は女の子と遊びたかったんだ。

「付き合ったよ」

「そつか。良かったじゃん」

「ハハハ……と笑って僕はトイレに走った。

良かったじゃんか、彼女が来て。と思うのに、すごいショックに陥ってる。」

嫌だけど、嫌だって言うのは僕のわがままで。瑞樹の幸せを、親友の僕が喜んでやらなくてどうする。

「親友？ まだ親友なのかな」

ぼつりとつぶやくと、ぶわぁつと涙があふれた。

もしかしたらもう、瑞樹は僕のこと友達とも思っていないかもしれない。連絡が取れないし、会ってもくれない。それがいい証拠じゃないか。

誤解さえ解ければ、元通りになると思っていた。だけど、誤解が解けてももう元通りにはなれない。

瑞樹は葵と付き合って、もう僕だけの瑞樹じゃなくなった。

テニス部の試合の日になり、僕はみんなの応援に行った。

あれから瑞樹の隣にはいつも葵がいる。

瑞樹の隣にはもう、僕の居場所はなくなってしまった。

メールも電話もしづらくなって、あれから一度もしていない。

観覧席から、女の子たちの黄色い声が聞こえてハッと我に返った。見ると、コートに瑞樹の姿があった。

すごい声援だ。

コートの中の瑞樹は、いつも通りのクールな表情。こんなすごい声援なのに、まるで聞こえていないかのように無関心、無反応だ。

試合の相手は二年生だ。体格は瑞樹より、ひと回りは大きい。

やっぱり綺麗だよな、瑞樹。あんなに走り回っているのに、全然余裕の表情で、そして優雅で華麗で……。

「キヤアアアー！」

ひととき大きな歓声があがり、見ると瑞樹がラケットを持った右

手首を押さえて立ちすくんでいる。

「瑞樹くん、どうしたのかな」

横にいた葵が不安そうに僕に聞いた。

僕も葵も瑞樹に駆け寄ることは出来ない。観覧席の金網越しに、心配するしかない。

瑞樹はその後、手首をかばってか、ラケットが思うように振れなくなり、残念ながら負けてしまった。

心配していた瑞樹の手首は、相手のボールが直接当たったための打撲だと聞いた。痛みがひどいのか、瑞樹はずっと顔がっらそうだった。

そばには葵がついていたから僕は近づけなかった。

瑞樹も僕の方なんか、一度も見えてくれなかった。

第3話に続く

### 第3話

瑞樹が隣にいなくなっただからと言って、僕はひとりぼっちになっただけじゃなかった。

クラスには友達も何人かいるし、瑞樹と別行動するようになって、部活でも話をする相手が増えた。

木原先輩は僕のことを気にかけてくれて、何かと相談に乗ってくれる。

だから寂しくない、とは言えなかった。たくさんの友達に囲まれてたつて、いくらみんなが親切にしてくれるからって、それで満足しているかって言われたら、していないのだ。

瑞樹がいない寂しさは、瑞樹じゃなきゃ埋められない。瑞樹と出会って二年間。いつだってそばに瑞樹がいたんだ。毎日会っていた訳じゃないけれど、中三の時に携帯を買ってもらってからは、毎日メール交換をしていた。

泊まりに行ったり、一緒に遊んだりして、楽しかったな。

僕は、ベッドにもぐりこんで、無理やり目をつぶった。寝るには早すぎるし、眠いわけじゃないけれど、することがないのだ。

瑞樹が手首を傷めてから一週間。まだ手首は痛むのかなあ。

ふと、思いついたように、携帯を開いた。今までは特に用がなくても、メールしていた。今はそんな軽々しくメールする勇気がなかった。

「ただの返事がもらえなくても構わない。心配されるのも迷惑かもしれないけれど、僕は『手首、大丈夫？』とだけメールを打って、思い切って送信した。」

「わー、送っちゃったよー」

僕は携帯を投げ出して、隠れるようにベッドにもぐりこんだ。

その途端、携帯が鳴り出し、どきん！ と心臓がはねた。

急いで携帯を手に取る。

「悠人、今、なにしてた？」

瑞樹が良く言っていた同じセリフを、先輩に言われる。

「今、塾からの帰りでさ、おまえんちの前にいるんだけど、ちょっと出てこないか」

僕は時間を確かめた。夜の九時をまわってはいるけれど、少しくらいならいいか。

門の前に、先輩は待っていて、僕が玄関を開けるとすぐ、いつもの笑顔で振り向いた。

「こんな時間に、悪かった？」

「いえ、暇だったし」

「そっか。…あれ？」

ふいに先輩が視線を通りに向ける。僕もつられて見ると、そこに瑞樹の姿があった。

声をかけるより早く、瑞樹は乗ってきた自転車ごと、くるりと方向転換して走り去った。

「瑞樹っ！」

僕は足を踏み出そうとして、ハッと止める。振り向くと先輩が、困ったように僕を見ていた。

「先輩…瑞樹が…」

「いいよ。追いかける。僕は別に用ってほどの用じゃない」

行けよ、と先輩に背中を押され、僕は瑞樹が走り去った方へ駆け出した。

自転車の瑞樹に追いつくことは出来ず、僕は走って瑞樹の家まで来てしまった。

どうしよう。瑞樹は家にいるんだろうか。

僕は迷って携帯を取り出す。でも、かけても出てくれないかもしれない。それなら直接、瑞樹のお母さんに聞いた方がいい。

すぐにお母さんは、瑞樹を呼んでくれた。けれど瑞樹の部屋のドアは開かない。

僕を中に入れてくれると、お母さんは瑞樹の部屋のドアを、ノック

クもなしに開けた。

「勝手に開けんなっ」

瑞樹が入り口まで飛び出して来る。

「瑞樹……僕」

声をかけると、瑞樹は僕からさっと目をそらす。

「早く仲直りしなさいよ」

お母さんは最近、僕たちが気まずいのに気付いている。

僕を残してさっさとリビングへ行ってしまった。

ドアをはさんで部屋の中と外で、僕と瑞樹は目を見れずに、じつと立ち続けていた。

「み……」

僕が口を開くより早く、瑞樹に腕を引っ張られる。

扉を閉めると瑞樹は、僕から手を放して、ベッドへと乱暴に座った。

「いいのかよ、あいつ」

瑞樹がしゃべってくれた。

「いただろ、今。会ってたじゃん、家の前で。ほっといていいのかって言ってるの。俺のとなんか来ていいのかよ」

ああそうか。瑞樹は僕と先輩が付き合っているとまだ思っているから。

「先輩が、行って来いって言ったんだ。瑞樹と話したかったし、せつかく来てくれたし」

「悠人があんなメールよこすからだろっ」

「あんなメール？」

首をかしげると、瑞樹はムツとして僕を見る。

「手首、心配してくれたんだろっ」

「う、うん。大丈夫？」

「そんなん、とつくに治ってる」

そう言っつて、瑞樹は右手を前に突き出した。

「悠人が心配してくれてるから。俺たち、しゃべれなくなってたし、

チャンスかなって思って直接手首、見せようとしたんじゃないか。なのにおまえ、あいつと会ってた。俺……邪魔しちゃって、何か、やつぱり……」

瑞樹も僕と仲直りしたいと思ってくれてたことにホッとした。だけれどまだ、先輩との事を誤解している。まず、誤解を解かなくちゃいけないって思った。

「僕、先輩と付き合ったりしてないよ」

やつぱりストレートにこれを言わなきゃいけない。

「別れたのか？ あいつ、悠人の事、捨てやがったのかよっ」

くそーあいつ！ と言いなながら瑞樹が立ち上がる。

「待って瑞樹、違うんだってば！」

今にも飛び出して行きそうな瑞樹を、必死で止める。

「庇うのか、あいつを！」

「違う。だから付き合っていないよ。最初からっ。先輩とは何でもないの。誤解なんだよ」

「誤解？」

やっと瑞樹が少し落ち着いていた。どう言う事かと説明を求められ、

僕は最初から思い出しながら順を追って話した。

けれど僕って理路整然と話すなんて苦手だから、話が前後したり、少し言い回しが違ったりしたかもしれない、きちんと伝えられたかどうかかわからない。

「そもそも、男同士なんだよ。付き合えるわけないだろ」

だから、そう強く言っつといた。

瑞樹は、眉間に深くシワを寄せて……。

怒ってる？

「先輩は瑞樹と僕が気まづくなってんの気にして、相談に乗ってくれたりしたんだよ」

「悠人は……あいつと付き合っていないって言う事なんだな」

大きなため息をつきながら瑞樹は言った。

やっとわかってくれたんだ。

「悠人のメール、すっげームカついたんだからな。あのメールのせいで、俺は悠人に近付けなくなったんだ！」

思い出した。先輩が勝手に送ったメールのことだ。

「あれも誤解なんだ、瑞樹」

「あれも誤解？」

「先輩が、木原先輩が、僕の知らないうちに送ってたんだ。どう言う内容かは、削除されててわかんないけど、ホントだよ」

「あ…んのヤローッ」

「なんて書いてあったの」

「あいつと付き合うことになったから僕には話しかけるなって。あいつがやきもちやくから、って悠人が言っ……」

「僕じゃないってばっ」

先輩の嘘つき！ 昼ごはんを先輩と食べるって内容だって言ったくせに、違うじゃん。

「そうか、誤解だっけ」

「そうだよ。僕は知らなかったんだ、そんなメール。急に、瑞樹が僕としゃべってくれなくなったし、目も合わせてくれなくなって、それで僕…すっごく悲しかった」

だからもう仲直りしたいんだ。

「悠人」

瑞樹がいつもの瑞樹の顔で、僕を呼んだ。

ベッドに座る瑞樹の前に立った僕の両手を、瑞樹がそっと握ってくれた。

「仲直り……してくれるの？」

「しよう。俺だって悠人がいねーとつまんねーし」  
「やっ」と瑞樹が笑ってくれた。

「明日からまた、一緒に登校しよう。一緒に昼飯食って、一緒に帰るうな」

「うんっ」

勢い良くうなずいた。

「あ、でも……瑞樹、葵ちゃんと昼ごはん、食ってるんだろ？」

「は？ 葵？」

「付き合ってるんだろ。葵ちゃんから聞いたよ」

「なんだそれは……付き合ってるよ。何だあの女、勝手なこと悠人に言ってるじゃねーよ」

訳わかんねーって、瑞樹は憤然としている。

「だけど、葵ちゃんとデートしたんだろ？」

「……あー、あれは……。悠人、言い訳させて？」

握られたままの手を瑞樹に引つ張られ、僕は瑞樹の隣に座らせられた。

「悠人に裏切られたと思って、ムカついてた時に、あの女が自分で金出すから、一緒に遊びに行ってくれって言われて。ま、いいかって思ってたのはホント」

「……葵ちゃん、携帯見せてくれたよ。瑞樹、楽しそうに笑ってた」

「ああ。観覧車に乗った時に、くすぐられて……。言い訳ばかりだけどさ、悠人。楽しくて笑ったんじゃない。あの女とは何もない。指一本、触れてない」

信じて？ と瑞樹は懇願するように、僕を見つめた。

別に、女の子と何しようが、僕が文句を言うことじゃないけど、でも瑞樹が何も無いって言うてくれた事で、ホッとしているのも事実なんだ。

「信じるよ、瑞樹」

そう言ったら瑞樹も、ホッとしたように胸を撫で下ろした。

「悠人こそ、あいつに何もされてねーよな？」

「……されてない」

襲われそうにはなったけど、未遂だもん。ちょっと唇は触れたけど……。

ちよつとだけ後ろめたくなった。

「今、ちよつと間があった。ホントは何かあったんだろ」

「そ、そう言う瑞樹こそっ、葵ちゃんと」

「俺の意思では疾しいことは何つつもしてねー絶対！」  
思いつきり、きっぱり、瑞樹が否定する。

瑞樹が言うように、僕だって僕の意味では何もしていない。だから、本当は瑞樹と葵の間に何かがあったとしても、それは事故みたいなものだって思えばいい。

そこまで考えたとき、僕の独占欲の強さってかなりだよなーって我ながら驚いた。

「瑞樹、僕ね」

瑞樹としっかり目を合わせる。

「ずっと瑞樹といれるって思ってたのに…葵ちゃんに、僕の場所…取られたって思ってた悲しくて……」

やっぱり瑞樹、綺麗だな。女の子が騒ぐの、当然だよな。

「瑞樹も、満更じゃなさそうにも見えてつらくて……」

男の僕でさえ、うつとりするほど見惚れるんだから。

「ごめんな、悠人。つらい思いさせた。けど、俺だって、悠人と同じくらいつらかった」

「ごめんね、瑞樹。誤解が解けて、ホントに良かった」

「俺も」

そう言って笑った瑞樹の笑顔を、これからも僕だけに向けていて欲しい。

「悠人、今日泊まって行けよ。一緒に寝ようよ」

「けど、明日は学校あるし、制服も鞆も持ってきてないよ」

「じゃあ週末。絶対泊まるって約束しよう」

約束してから瑞樹は、僕を自転車の後ろに乗せて家まで送ってくれた。

門の前に自転車を止めると、瑞樹は僕と向かい合い、手を伸ばしてきた。

瑞樹の手のひらが、僕の頬に触れる。

じっと瑞樹を見上げると、驚くほどまっすぐに見られていてちょっとドキツとした。

「瑞樹？」

僕が呼ぶと、瑞樹は「ああ」と小さく言っつて、頬に当てていた手を、ポンツと僕の頭に乗せて軽く叩いた。

「今日、悠人がメールくれなかつたら、悠人が追いかけてくれなかつたらこうしてなかつたんだなーって思っつて、しみじみしちやつた」

「瑞樹だつて、来てくれたじゃんか」

「ん…まあそうだけど、やつぱ、悠人のメールのおかげだよ」

おかげつて言葉にちよつと照れる。褒められたみたいで、くすくすつたい。

「じゃあ、また明日な」

瑞樹が自転車にまたがつた。

「うん。明日からもずつと、友達だよ」

「ああ、友達…：：：だな」

じゃあなつて、手を振つて瑞樹は帰つて行つた。

瑞樹の背中が見えなくなるまで見送りながら、何故だか泣きたくなつた。

それと同時に、頬に残る瑞樹の手のひらの感触に、何故だか胸が痛くなつた。

瑞樹と仲直りしたことは、すぐに木原先輩の知るところになつた。

「僕さあ、罪悪感でいつぱいだつたから、仲直りしてホツとしたよ」

先輩は、瑞樹にもごめんなつて謝つてくれた。

「二度と悠人に変なことすんなよっ」

「ハイハイ。じゃあ仲良くね」

先輩が僕たちの前からいなくなると、瑞樹はムカツクと言つた。

「あいつ、ふざけてる」

「え、どこが？」

「ハイハイって言っただろ？ ハイは一回でいいんだよっ」

「いいじゃん。謝ってくれたんだからさ」

「えー、そうか？」

瑞樹はまだ口をとがらせている。

「やっぱ、テニス部やめよう、悠人」

「ええっ、やめるの？」

もう何も問題なさそうなのに。

「あいつもあの女も、二年のやつらも、ヤなんだもん」

あいつって木原先輩？ あの女は葵のことだよな。

「でも瑞樹、テニスが好きなんだろ？」

高校にテニス部があると知ると、張り切って入部届けを出してたよな。

「テニスは学校じゃなくてもできる」

「そりゃそうだけど……」

「悠人は続けたいのか？」

僕はラケットでボールを打ってみたいな、と思っていた。早く打てるように練習して上達すれば、きつともっとテニスが楽しくなるだろうなって、思っていたんだ。

「放課後まで考えとけよな」

朝のホームルームの始まりを告げるチャイムに動かされ、瑞樹は行ってしまった。

もともと瑞樹に誘われて入ったテニス部だ。瑞樹がやめるって言ったら一緒にやめてもいいかなあ。だけど、いつだって瑞樹に言われるままに流されて来たような気はしてたんだ。それで嫌だとか別に思いもしなかった。

今は？

瑞樹の選択はいつも正しいと思っていたからこそ、従うのに戸惑いも迷いもなかった。だけど、今の瑞樹のやめたい理由はあまり納得出来るものじゃない。嫌だからやめるなんて瑞樹らしくない。

昼休み、昨日約束したとおり、僕は屋上上がった。

いつも瑞樹が先に来ている。それは僕がトロいんじじゃなくて、瑞樹の教室がある東棟の方が屋上へ行く階段に近いのが理由だ。

「あ……」

瑞樹のそばに葵がいるのに気付いてしまった。

葵は僕と同じクラスなのに、来るのが早かったんだな。

やっぱり僕がトロいのかな。

しばらく躊躇して、二人の様子を遠くから見ている。何だか言い争いをしているように見えて、近づけない雰囲気だ。

「悠人！」

瑞樹が僕に気付いて、「来いよ！」と呼んだその瞬間、葵が瑞樹の頬を叩いた。

僕は驚いて走り出していた。と、同時に葵がこっちに向かって来る。

「バカッ！」

すれ違いざま、葵が僕のことを突き飛ばして、屋上の出入り口から出て行った。

「大丈夫か悠人」

「瑞樹こそ」

「僕はいいんだよ。当事者だから。くそっあの女、悠人にまで当たりやがって許せねー」

「葵ちゃん、泣いてたよ。良かったの？」

「いーのいーの。勝手に怒って泣いたんだ。勝手にその気になられて迷惑してるのはこっちの方だ」

瑞樹のことだから、葵にキツイ言い方したんじゃないだろうか。

「瑞樹、葵ちゃんに何言ったの？」

「悠人が言っただんだけ、自分の場所、取られたみたいって。女に取られて悲しかったんだろ？ だから今日から悠人と一緒にいるって、言っただけじゃん」

悪いのかよ！ と瑞樹が声を荒げた。

僕のためつてとは嬉しいけど、そのために女の子を泣かせて平気なの？

「ごめん。そんな顔すんな、悠人」

瑞樹が手を伸ばし、僕の手を引っ張った。

「座れよ。それで早く食おうぜ。昼休み、終わっちまう」

瑞樹は気まずそうに、僕から目をそらしたまま弁当箱を開く。

僕も瑞樹の隣に座り、弁当を食べた。

「やっぱ、部活やめよっかな。なんか嫌になった」

瑞樹は、ハーとため息をついて、僕をチラリと横目で見た。

「悠人、続けたいならいいよ。俺はやめる。俺に合わせてやめなくたっていいよ」

瑞樹に、勝手にすれば？ って言われているようで悲しくなった。

瑞樹に、ポンツと突き放されたようで……寂しくなった。

## 最終話

放課後、部室のドアを開けると、ちょうど瑞樹が出てくる所だった。

「今、退部届け出して来た。悠人は？ どーすんの、決まった？」

「……もう少し、続けていい？」

「俺に聞くなよ。続けたいなら頑張ればいいし」

ほら、まただ。瑞樹は、僕がどうしようがどうでもいいんだ。

「わかった。続ける」

バイバイと手を振って、瑞樹を見送った。

いいよ。瑞樹がいなくなたって友達出来たし、木原先輩だっているし。

「悠人？」

木原先輩が部室から顔をのぞかせた。

「長瀬、やめるって。コレどうしよう。預かつちゃったけど、顧問に出していいかな」

先輩は、瑞樹の退部届けをひらひらさせた。

「いいんじゃないですか？ 瑞樹が辞めたいって言ってるんだし」

「あれ、もしかしてまたケンカ？」

僕の言い方が素っ気なかったからか、先輩が心配そうに僕を見た。僕は、曖昧に笑ってからロッカーを開き、ジャージに着替える。

「あのさあ、悠人」

先輩が僕の背後から聞いた。

「長瀬のどこがいいんだよ。見掛けだけじゃん、あいつ。口は悪いし年上に対する礼儀もなってるない」

その通りかもしれないけど、他人に瑞樹の悪口を言われると頭に来るな。

「好きなんだろ？ どこが好き？」

「……どこが好きとか、そういうのじゃない。瑞樹のどこか一部分

が好きなんじゃないやなくて」

自分でさえ自分の気持ちが悪く分かってないのに、僕何言ってるんだ？

「僕、瑞樹の全部が好き。瑞樹が瑞樹だから好きなんだ。友達とかそれ以上の感情とか、良く分からないうけど一緒にいたい。そばにいたい。ずっと僕だけを見て欲しい」

言ってしまったって、確信した。

僕は瑞樹が……そういう意味で、好きだったこと。

「ふーん。そんなに好きなんだ」

先輩は驚くわけでもなくうなずいた。もしかして呆れて言葉が思いつかない？

「長瀬もんじゃない？ あいつも悠人のことが好きだろ」

「瑞樹は僕を求めてくれるし、大事にもしてくれるけど、それは親友としての僕であって、僕が思っているような、僕と同じ意味での好きなんじゃないんです」

自分の言葉なのに、ズキンと胸に刺さっちゃった。

週末、約束どおり瑞樹の家に泊まりに行った。

晩御飯は焼肉で、またも長瀬親子の肉取りバトルを前に、見るだけでおなが一杯になった。

いつものように入浴を済ませ、瑞樹の部屋に入ると、瑞樹が僕をベッドに入れる。

「どう？ 悠人、部活で苛められたりしてねーか？」

心配そうに聞きながら瑞樹が隣に潜り込んで来る。

「大丈夫だよ。うまくやってるつもり」

部活は大丈夫だけど、僕の心臓がヤバイ。今まで、こんなことにならなかつたのに、意識しすぎなのか、ドキドキがひどいんだ。

「そうか。楽しい？」

瑞樹はいつもと変わらず、じつと顔を覗き込んだりする。

「瑞樹が一緒だと、もっと楽しいのにな」

「悠人……」

「瑞樹、部活やめる時、僕に好きにしろって言っただろ？」

「言ったけど？」

「僕……僕の事なんかどうでもよくなっただって、突き放された気がしたんだ。いつもなら、おまえもやめるよって言うのに、瑞樹……」

「違うんだ悠人。俺は悠人の意思を尊重しようと思っただけだ。いつも強引に俺の好きに悠人を振り回して、悪いよなーって反省してさ、そんであんな言い方になったけど。悠人がそんな悲しいって思ってたなんて知らなかった。ごめん」

突き放されたんじゃないかって事？

瑞樹は僕のことを尊重してくれただけだった？

「不安だった？」

瑞樹はものすごく心配そうに、僕を見てくれる。そうだよ、突き放されたなんて思う方がバカだ。瑞樹はこんなにちゃんと僕の事を考えてくれていた。

「もう平気。今日の瑞樹、今までと同じに優しくしてくれる」

瑞樹は何も変わらない。いつもと同じだ。今までと同じように僕を大事にしてくれる。なのに僕は、瑞樹に今までと違う感情を持ってしまった。

「安心してるよ、悠人。ずっと変わらずおまえが好きだよ」

瑞樹は僕の頭を撫で回すとすぐ、ふざけ半分みたいに僕の体をくすぐってきた。

「ちよっ……やだよ、くすぐったっ……」

笑いながら、泣きそうになった。

好きだよ、なんて瑞樹に言われたけれど、軽すぎる。瑞樹の「好き」と僕の「好き」の意味はきつと別のものだ。だけど今ならどさくさに紛れて僕も言える。

「好き。大好き……みず……」

鼻の奥がつんとしてきて、言葉が続かなかった。

「な……いてんのか、悠人」

無理やり瑞樹に顔を覗き込まれる。

「どうしたんだよ。どうして泣くんだ？ 俺、なにか嫌なことしたか？ 何か気に障ったんなら。……ああ、体、くすぐったの嫌だった？」

「違うよ。瑞樹は悪くない！ 悪いのは僕の……僕の方」

瑞樹に変な下心とか、変な意味で好きになってしまった僕が悪いだけだ。

「ちよつと待ってる」

瑞樹は暖かいココアを作って持ってきてくれた。コップと一緒に手を添えて、飲ませてくれる。

優しい優しい瑞樹。

……好きになって……ごめんね。

「落ち着いたか？」

瑞樹の問いかけに、コクンとうなずいた。

「じゃあ聞くけど。さっき……俺の事、好きって言ったよな」

瑞樹が窺うように、僕を見た。

あんな風に泣いてしまつて、好きなんて言ったんだ。軽く流してはくれないよね。

「それってさ、キスしたいくらいの好き、なわけ？」

「えっ！」

びっくりして言葉が続かない。もしかして、瑞樹に気持ち、バレちゃった？

「瑞樹、それは……」

どうしよう。こうなったら思い切って告白しちゃおうか。

「僕は……」

上半身を起こして、上から瑞樹を見下ろす格好になる。

「ボ……僕はみ、み……」

だめだ。声が震える。言葉が喉で詰まったようで、出てきてくれない。

「何だよ悠人。そんな目で見ると襲つぞ」

「おそ……」

次の瞬間、くるんと体が反転して、すごい勢いで押し倒された。

「みず……何す……んっ」

唇に何かが押し付けられた。けれどそれはすぐに離れて、目を見開いて見上げるとすぐ間近に僕を見下ろす瑞樹の顔があった。

「何……したの、瑞樹」

すごい怖い顔で、瑞樹は僕を見てる。

「瑞樹…怒ってんの？」

「ごめん。どうかしてた」

僕の体を突き放すと、瑞樹はベッドに座り、僕に背を向けた。

僕もゆっくり体を起こしてベッドに座る。そしてそっと、唇を指で触れた。

なんだつたんだろ、今の。あまりに一瞬で何が何だかわけがわからない。

「瑞樹……」

瑞樹のパジャマの背中を、くいつと引っ張った。

「何だよっ！」

振り返りざま怒鳴られ、不覚にも体がビクンとはねた。

「わ、悪い、大声出して。そんな顔すんなよ、悠人」

僕の背中に腕を回して、瑞樹が抱きしめてくれる。一瞬、ちよつとだけ身を引きかけたけれど、僕はそのまま、黙って瑞樹の肩に頭を落とした。

「悠人……」

呼ばれて顔を上げると、瑞樹が僕の頬に手を当てた。

瑞樹の顔がゆっくりゆっくり近づいて来る。

もしかして、キスしてくれるのかな。なんて淡い期待を抱いて、大人しくされるがままになっていたら、本当に瑞樹の唇が僕に重なった。

後頭部に手をかけられて、ぐつとひきよせられたら、もっとキス

が深くなった。

息が苦しくなって、瑞樹の背中に手を回して、パジャマを掴んだ。やっと口が解放されたかと思っただら、瑞樹のキスが僕の首筋に移る。

くすぐったいような、気持ちがいいような、変な感じ。

「あ、や…嫌だ」

瑞樹の手が、僕のパジャマのボタンを外しかけた時、唐突に我に返った。

何してるんだ、いったい。

瑞樹は僕を友達と思っていたんじゃないの？

それとも僕の気持ちに気付いて、同情でしてくれた？

僕は瑞樹の体を、両手でぐいっと引き離した。すぐに瑞樹も我に返ったように、明らかに動揺を見せた。

「何これ、どういう事？」

「悠人だってノリノリだったじゃんかよ」

それは、好奇心ってこと？ つい、ノリでキスしたら、僕も乗ってきたから。

「……ごめん、瑞樹」

穴があいたら入りたいつて、こんな気分を言うんだろうな。

「おまえが悪いのかよ。いきなり襲ったの俺の方だろ。謝るのは俺の方だよ」

ふいに瑞樹に腕を掴まれ、思わず身をすくませた。

「そんな怖がるなよ、悠人。ごめん」

謝りながら、瑞樹の目がだんだん潤んでくる。

「友情とか、親友とか、そんなのカムフラージュなんだよ。俺はキスとかその先とか、したいくらい悠人が好きなんだ」

何、言ってるの？ 瑞樹。

「一年くらい前に悠人が好きって気付いて。で、他の誰より可愛いって思ってた、ずっとこんな風にしたくって。けど我慢して我慢して……」

瑞樹が…僕を…好き？

「こんなことしちゃってさ、今までの我慢は何だつて……ホントマジでごめん」

瑞樹とキスをした。そういうことがしたいくらい好きって、確かに言っただよね。

「瑞樹」

「何だよ、悪かったって言うてんだろ。気持ち悪いだろ、俺なんか思っただよ、瑞樹。僕も…好き」

瑞樹の気持ちを聞いたなら、もう告白するのが怖くない。

「何言っただよ。同情かよ」

「違う。僕も瑞樹とキスとか、それ以上とかしたいくらい……好き、だよ」

泣いてる顔も綺麗だ、なんて思うのって不謹慎かな。

「言えなくてごめん。僕、ホントに瑞樹が好きだよ」

「何だよっ！ 友達友達って強調しまくってたくせに」

「瑞樹だつてしてたよ。友達なんだからって何度も言った。だから僕、言えなかった。友情が壊れるの、怖かったんだ」

「おまえ、男同士で付き合えないって言った」

「あの時は、先輩と何でもないって事をわかって欲しくて必死だったから」

「悠人っ」

まるで体当たりのような勢いで抱きつかれた。

「俺、もう死んでもいいっ」

「やだよ、瑞樹。死んだら嫌だよ」

「死なねーよ、例えだろ。死んでもいいくらい嬉しいってことだ」

「じゃあ僕も。死んでもいいくらい嬉しい」

「くっそー、早く言えよ。っつーか、早く告白すれば良かった」

そうしたら、無理だったかもしれない、と思った。

僕が気持ちに気付いたのって最近だもん。もっと早くに告白されていたら、混乱したかもしれない。

「キスしよう悠人。両想いのキス」

ずっと前から瑞樹は好きだったって言ってくれた。  
気付かなくてごめん。

僕が悩んで苦しんでた期間なんか、瑞樹に比べたら全然及ばない。

「キスしかないからね、悠人」

チュツと短く唇に触れられた。

「どうして？」

「さっき嫌がっただろ？ 脱がせようとしたとき、嫌だって悠人、  
言った」

「あれは、だって、瑞樹の気持ちなんか知らなかったし、怒って八  
つ当たりされてるみたいで怖かったから」

だから、今は全然怖くないし、嫌じゃない。

「だから今後一切、悠人に手を出すなよ」

部活が終わる頃、僕を迎えに来た瑞樹は、僕たちが付き合ったこ  
とを先輩に言った。

「で、これは何かな」

先輩の手には、瑞樹が出した入部届けがある。

「おまえが悠人に余計なことをしないように、見張つとくために入  
部するんだよ」

「いらないよ、こんなの」

僕たちの目の前で、先輩は瑞樹の書いた入部届けをビリビリと、  
破いた。

「キミは退部していないじゃないか」

悪戯っぽく先輩は笑うと、以前、瑞樹が渡した退部届けを目の前  
でヒラヒラさせた。

「休部届けを顧問に出しといたからね」

「勝手なことすんなよっ」

「ダメだよ瑞樹、こんな時は、先輩にありがとうございますって言

うんだよ」

瑞樹の振り上げた腕を、僕は押さえて教えた。

「いい子だね、悠人」

先輩が、僕の頭を撫でた。

「悠人に触るなって言っただけだっ」

「いいじゃん、これくらい。僕だって悠人が好きだったんだ。それをおまえにくれてやるんだ。少しくらいいいだろ。な、悠人」

少しならいいと思う。

だって、先輩が好きだって言ってくれたから、男同士でも恋愛出来るんだって知ったんだ。

恋に気付いたのは、先輩のおかげだから。

「ちよつと、待って瑞樹……」

先輩が帰った後、部室で着替えていると、何故だか変な展開になっていた。

わけがわからないままどんどん脱がされて、戸惑う僕の言葉を聞いているのかいないのか、瑞樹の手は止まらない。

恋愛の経験値ゼロの僕は、瑞樹が次に何をするのかさっぱりわからない。

されるがままでいいの？

瑞樹の手が、僕の足の間に届く。

「ちよつと……うわっ」

「あ、ごめん悠人。嫌だった？」

瑞樹が手を引つ込めて、僕の顔を覗き込んで来る。

「俺、こんなこと慣れてないし、要領悪いし、焦るし……」  
下手くそでごめん、と瑞樹が謝る。

「そんな事ないよ。僕、瑞樹のキスとか気持ちいいし、僕が知らないだけできつとたくさん経験あるんだろうなって思ってたくらいだよ」

「あるかよ。悠人一筋なのに。俺、悠人がファーストキスだもん。」

それ以上なんか、全くの初心者なんだから」

そうだったんだ。と思うとかなり嬉しい。

普段、涼しい顔をして、汗なんかほとんどかかない瑞樹の額に、たくさんの汗を見つけた時、瑞樹が一生懸命なんだって知った。

「まあ、焦んなくても悠人は、ずっと俺の隣にいるんだよな？」

「いてもいいの？」

「いなきやダメなんだってば！」

「うんっ。いる。ずっとずっと瑞樹の隣にいるからねっ」「」

僕は瑞樹に勢い良く抱きついた。

大好きな瑞樹のそばで、きつとこれからもずっと、瑞樹は僕に優しい笑顔を向けていてくれるだろう。

最終話 (後書き)

ここまで読んでくださり、どうもありがとうございました。

こんなのボーイズラブじゃないかもしれない。と、思いながらも一生懸命書きました。

これからもっと小説が上手になりたいので、感想、評価、アドバイスなどいただけると嬉しく思います。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0093c/>

---

笑顔のトナリにずっと

2008年11月7日06時31分発行